マムシグサとマムシ

2012.06.04

写真 1:ナンゴクウラシマソウ

写真 2:マムシ

マムシグサ（別名テンナンショウ）という名の植物がある。食用のサトイモやコンニャク芋の仲間といった方がとおりが良い。地下に偏球形の芋があり、丸い地下茎なので球茎と呼ばれる。木々の葉がまだ開かない春先に、この芋から円錐形の太い新芽が地上にニョッキリと伸び出して来る。一見茎に見えるが、茎は芋の部分、実は葉鞘が茎様に変化したもので偽茎とも呼ばれる。草丈は種や生育環境にもよるが、1mを超えるものも珍しくない。この茎まがいの葉鞘やその外側の鱗葉に、茶褐色のまだら模様があり、これが毒蛇マムシのまだら模様に似ていることから、マムシグサと呼ばれる。この仲間は雌雄異株で、しかも性転換することが知られているが、それはまた別の機会に。

この仲間に、花の付属体と呼ばれる先端部が、細い糸状に数十cm伸びる珍妙な姿をしたウラシマソウというのがある。細く伸びた糸状の付属体を、浦島太郎の釣り糸に見立てたという粋な名前である。香川県では海岸近くに結構見られる。ウラシマソウに似て、草丈が低く、葉の幅が狭いナンゴクウラシマソウというのがある。花の着く位置が短く、地上付近に花が咲いているように見える。

ナンゴクウラシマソウは、香川県では極稀なもので、ぜひ一度見たいものと必死で探し求めていた頃、ある所で初めてこれに出会った。丁度花時で、胸躍る思いである。喜んで観察しようと近づくと、株元でジィージィーと変な音がしている。妙な事があるものと、よく目を凝らしてみると、太いマムシがとぐろを巻き、立てた尻尾を奮わせて威嚇音を出しているのだった。

草のマムシ模様と本物のマムシの模様が重なって、遠目に全く気がつかなかったのである。間一髪で難を逃れた。

久米　修

今週の一枚：ナンゴクウラシマソウ（写真 1）